『否定弁証法』における身体

変容可能性をめぐって

高橋奏子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

本発表の目的はテオドール・W・アドルノの晩年の哲学的主著『否定弁証法』(1966)における「肉の復活」と身体の関係を明らかにすることである。『否定弁証法』は今日の哲学のあり方という大きな問いに始まり、最終的にはその対象が形而上学へと絞られ、形而上学の可能性が模索されることで締め括られているのだが、その中でアドルノが形而上学の向かうべき理念として設定するのが「肉の復活」である。「肉の復活」とは、従来の哲学の問題点であった心身二元論とそれに伴う精神の優位が解消されることであるが、アドルノはその希望として「変容した身体」(6-393)があると言う。本発表はこの記述をもとに、『否定弁証法』における身体概念の内実を明らかにする。ここで問題となるのは、即自的に存在する、志向性を欠いた身体である。

広く知られているように、アドルノは否定弁証法という方法的原理を打ち出すことで、従来の哲学、とりわけドイツ観念論を乗り越えようとする。否定弁証法は理論一般を断念し、そのつど限定的な否定を通じて命題の虚偽性を暴露することで、真理に少しでも近づこうという運動的なプロセスである。アドルノは命題を否定的な契機によって解体することによって、むしろその命題の真価を知り得ると考える。無媒介的に物事を肯定してはならないが、同時に一度否定され、反省された命題がすなわち真となるのでもない。否定弁証法では、自らの思考を絶えず自己批判することによって、いわば理性の無限な循環のなかにとどまることが目指される。

否定的な契機として重視される概念に、「経験」と「苦痛」がある。経験や苦痛は、「消えろ」(6-203)、「一体全体これで全てなのか？」(6-368)、「事態は変わらなければならない」(6-374)などといった、明確な否定性によって、主体が行った概念化の不完全性を明らかにし、否定弁証法を可能にする。このような身体性による否定的契機がアドルノの思想において重要な役割を果たしていることは疑いようがない。近年でも、アドルノの身体性に社会批判的契機を見ようとする動きは活発である(Zuidervaart 2007, Schßlär 2017 など)。

しかしアドルノの記述を見ていくと、主観によって媒介されているか否かによって、身体性と身体を区別しなければならない場合があることがわかる。なぜなら、アドルノの議論においては時折、経験と苦痛とは異なり、身体だけが主観を媒介としていない即自的に存在するものとしても記述されているからである。

アドルノはこのことを、肉体と魂の分離という事態を解消するための「希望は、ミニヨンの歌においてと同様に、変容した身体に縫い付けられている」(6-393)と言い、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの就業時代』に登場するミニヨンの歌と結びつけて論じている。ミニヨンの歌は、彼女が二度と帰ることの叶わない故郷を想って歌ったものである。そこで本発表では、上記の内容を元に、アドルノの身体観をミニヨンの歌との関連の中でより具体的に考察する。ユートピアへの憧憬を歌うものでありながら、それ自体がヴィルヘルムにとって抗いがたい魅力に富んだユートピアそのものであるかのように思えたミニヨンの歌と同様に、「変容した身体」は、事態が変わらなければならないのだと訴える批判的契機のみを意味しているのではなく、そこから瞬間的にであれ解放された、否定性が完全にないような精神の救済、つまりユートピアそのものとも接続しうるものとして考えられなければならないのである。

本発表を通じて明らかにしたいことは以下の通りである。経験と苦痛はたしかに否定弁証法を可能にする契機だが、その限りですでに主観性が入り込んでいる。それゆえアドルノにおいて、経験と苦痛は、すでに否定弁証法の働きのうちにある。言うなれば、経験と苦痛は、概念によってようやく把捉されるものであり、それらは直接性の印ではなく、主体の思考によってこそ浮かび上がり重要性を帯びる。このことから、経験と苦痛に意味を持たせ、それらを正当化することはイデオロギー的であるとアドルノは強く批判する。経験と苦痛は主観的否定性として重要であるものの、それ自体に希望を見出すことはできない。

対してアドルノにおいて身体は、最も無意味で、志向性を欠いており、主観によって媒介されてもいない即物的なものであるがゆえに、経験と苦痛とは異なり変容可能性に開かれている。アドルノはこのことを「盲目的なソーマ的快楽は、それ自体にはなんの志向もないのに最終的な志向を充足させるものである」(4-68)と述べる。つまり、主観によって媒介されている経験と苦痛には志向性があり、即物的な身体にはそれがない。逆説的に、志向を欠いているがゆえに、身体は主観性からの解放の兆しとして理解されうるのであって、アドルノが設定する限定否定の枠を超えて、「絶対的精神の王国である観念論とは完全に無縁であるような」(6-207)「肉の復活」に通じる可能性を秘めていると考えられる。

〈参考文献〉

Suhrkamp 社より出版されているアドルノ全集 Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften* Bd. 1-20 (Suhrkamp. 1970～1986) からの引用箇所は、本文中のカッコ内に表示する。前の数字が巻数を、後の数字が頁数をあらわす。なお引用については邦訳も参照したが、基本的には原文を文意に沿って筆者があらためて訳している。

Lambert Zuidervaart, "Metaphysics after Auschwitz: Suffering and Hope in Adorno's *Negative Dialectics*", Donald A. Burke, Colin J. Campbell, Kathy Kiloh, Michael K. Palamarek, and Jonathan Short, *Adorno and the Need in Thinking New Critical Essays*, University of Toronto Press, 2007, pp. 137-16.

Michael Schüßler, "Leib und Körper in der Kritischen Theorie Theodor W. Adornos und der Philosophischen Anthropologie Helmuth Plessners", *Mensch und Gesellschaft zwischen Natur und Geschichte, Zum Verhältnis von Philosophischer Anthropologie und Kritischer Theorie* , De Gruyter, 2017.